



学校の魅力化

「国際標準の教育」の実現のために ロードマップを描き、改革を推進

山梨県・私立山梨学院高校

1分
で分かる軌跡

10年前、少子化に対応するため、国際標準の教育を目指した改革に着手した山梨県・私立山梨学院高校。2017年に国際バカロレア（以下、IB。*1）の認定校となり、IBのノウハウを生かした探究学習の充実を図った。加えて、改革の5つの重点分野についてロードマップを作成。教師間で改革の手法を議論していった結果、希望進路別のきめ細かな指導や、部活動のさらなる飛躍が実現した。国際化も進展し、生徒が外国人留学生と日常的に交流できる環境が整った。

#学校改革のロードマップ

#多様な希望進路実現の支援

学校概要

設立 1956（昭和31）年
形態 全日制・通信制／普通科／共学
生徒数（全日制） 1学年約390人
2023年度卒業生進路実績（全日制）
国公立大は、北海道大、筑波大、東京工業大、東京大、東京農工大、新潟大、山梨大、信州大、大阪大、横浜市立大、奈良県立医科大などに33人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大、山梨学院大などに延べ381人が合格。

* 1 スイスのジュネーブで設立された非営利団体で、3歳から19歳までの国際的な教育プログラムを開発・提供している。

変革の背景

少子化への対応として 学校の魅力化を図る

長年、進学や部活動で実績を上げてきた山梨県・私立山梨学院高校は、2014年度、加速度的に進む少子化を見据えて、学校の魅力を向上させるための改革に着手した。吉田正校長は、次のように振り返る。

「当時、本校は進学実績や部活動が好調でした。それを維持するためにも、少子化への対応として学校のさらなる魅力化が必須だと考えました」

加えて、普通科特進コース・進学コース、英語科、併設中学校が、それぞれに教育目標を立てて教育活動を行っていたため、学校としての一体感が持ちにくい状況にあり、それを変えたいといった思いもあった。「受験生から選ばれる学校になるために、自校の魅力として何を打ち出すべきかを模索した結果、『国際標準の教育で、『夢』の実現を応援する『教育力の山梨学院』』という

共通の目標にたどり着きました（吉田校長）

変革の一手①

ロードマップを作成し、 当事者意識を醸成

国際標準の教育を実現するためにまず取り組んだのは、英語教育の強化だ。英語4技能の育成が強みだった英語科（22年度、特進コースアドバンスト系列に再編）の取り組みを全校に広げ、クリティカル・リーディングやアカデミック・ライティングなどの指導を拡大し、外国人教師による授業も行った。加えて、探究的な素養や異文化理解に精通した国際的な視野を持つ人材を育成するため、17年にIB認定校となり、探究学習などの充実を図った。「複数の教師がIBの研修を受け、探究スキルや論文の指導法などを身につけました。探究的で深い学びを重視するIBのノウハウを導入して、本校の教育力の底上げを図っていきました」（吉田校長）

そうした新たな教育活動を推進していった同校は17年度、改革の中期的な道筋をつけるため、具体的な目標とその達成年度を定めたロードマップを作成した。特進コース長の宮崎健副校長は、ロードマップの作成の意義を次のように説明する。

「例えば特進コース（22年度、特進コースプレミアム系列に改称）では、『19年以降は複数の生徒が東京大学に合格』と目標を設定し、その達成に向けて何をすべきかをコース担当の教師間で話し合いました。目標を具体的に示し、達成に向けた手立てを教師自身が考えることで、教師一人ひとりが学校経営にかかわっているという当事者意識を持つて、改革に取り組むことができました」

ロードマップは20年1月に更新し、「進学実績の向上」「英語教育の充実」「国際化に向けた体制の構築」「教育環境の整備」「スポーツ・文化活動振興」について、5か年計画を立てた（P.40図1）。そして22年4月には、各科を現在の2コースに再編（P.40図2）。各コース・系列は、ロードマップに基づいて改革を進めている。



校長
吉田 正
よしだ・ただし
同校に赴任して33年目。



副校長、ハイスクールスポーツセンター長
相馬 弘
そうま・ひろし
同校に赴任して42年目。国語科。



副校長、特進コース長
宮崎 健
みやざき・たけし
同校に赴任して28年目。地理歴史科。



特進コースアドバンスト系列主任
堀内 晃
ほりうち・こう
同校に赴任して20年目。英語科。国際交流担当。



国際交流担当
当真 テニース
とうま・てにース
同校に赴任して3年目。英語科。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

図1

ロードマップ (抜粋)

		中期(5か年)目標		中期(5か年)アクションプラン				
項目	目標	説明	ロードマップ					
			2020	2021	2022	2023	2024	
1	進学実績の向上	難関10大学、海外大学への進学	中高一貫のスケールメリットを生かし、生徒の個々のニーズに沿った授業を展開していく。中学校では、総合的な学力の形成を図るとともに、プレミアムジュニアの選抜コース、バックアップコースを拡充させる。高校では、学習進度が速い生徒向けの課外サテライン学習を充実させていく。授業方法についても、アクティブ・ラーニング型授業の導入を促進し、主体的な学習をサポートする。					
2	英語教育の充実	英語4技能の強化、バイリンガル化	大学入学共通テストでは、民間資格の活用は保留となったが、今後も4技能重視の英語が求められる。中・高とも授業構成を再編していくとともに、オンライン学習を充実させる。モバイルPCの台数を増やすとともに、14Uメソッド(*2)とも連携していく。また、既存科目を検証しつつ、バイリンガル科目を増やしていく。					

※学校資料を基に編集部で作成。



写真 日本人生徒による外国人留学生のための日本語教室の様子。アメリカ、ウガンダ、中国出身の外国人留学生は、かるたやしりとり、伝言ゲームなどの遊びを通じて日本語を楽しく学んだ。

図2

2022年度からのコース設定

	系列・系名	目指す進学先
特進コース	プレミアム(P)系列	難関国公立大学、医歯薬学部系大学、国公立大学、難関私立大学
	アドバンスト(A)系列	難関私立大学、3科目受験型の国公立大学、国際化に力を入れている大学
進学コース	総合進学系、健康スポーツ系、法学・経営系、健康栄養系、教育保育系	山梨学院大学、山梨学院短期大学、その他

※学校資料を基に編集部で作成。

変革の一手 ②

希望進路の実現に伝えられる
きめ細かな支援体制に

「進学実績の向上」に向けては、同じ目標を持つ生徒が集まり、切磋琢磨する集団をつくる中で、教師は手厚い支援を行っている。特進コースプレミアム系列は、「難関国公立系」の文・理、「国公立系」の文・理と、集団を4つに分け、1年次は国語・数学・英語の習熟度別授業を行い、2年次からは科目選択制による徹底した少人数教育を実施している。

特進コースアドバンスト系列は、「総合的な探究の時間」においてSDGsをテーマとした探究学習に取り組み、課外活動で生徒独自の探究学習も推奨した。これまでに生徒は、子ども食堂で小学生に勉強を教える活動や、オンライン・ミュージックフェスの企画・運営などに取り組んだ。特進コースアドバンスト系列主任の堀内晃先生は次のように語る。

「探究学習での生徒の活動は多彩であるため、生徒の力をそれぞれ伸ばす指導ができるのか不安でした。

生徒が自分で計画を立てて行動し、結果を振り返る中で、他者とのかわりについて考え、自分の成長を実感できるよう、支援しました」

探究学習の充実と前出の英語教育を柱とした学校独自の手法で、生徒の希望進路の実現を支援していると、宮崎副校長は語る。

プレミアム系列で東京大学の学
校推薦型選抜の合格者が初めて出た時は、私たちの取り組みは間違っていないかったと自信が持てました」

進学コースは、系列大学・短期大学への進学を軸としつつ、生徒の多様な希望進路の実現に伝えられるよう、他大学への進学に向けた指導も強化。大学入学後の学びを見据えて、「子ども学」や「法律学」などの選択科目も充実させた。

また、国際化をさらに推進しようと、長期の外国人留学生を対象とした日本語コースと、生活を支援するサポートオフィスを設置した。外国人留学生の受け入れ体制を整備した結果、欧米やアジア、アフリカなど、様々な国の高校生が留学するようになり、在校生も日常的に国際交流ができる環境となった(写真)。

*2 Improving the 4skills in Unison の略で、英語4技能教育のための同校オリジナルの英語メソッド。

顧問の意識改革で結果を出し、生徒の人間力も高める

「スポーツ振興」に向けては、部活動を通じた人間力と競技力の向上を支援する「ハイスクールスポーツセンター」主導で、顧問の意識改革を図った。その背景には、競技力が高ければよいという風潮が見られたことがあった。

そこでまず、全運動部の顧問が参加する会議を月1回実施するようにした。同会議で専門家による部活動運営や栄養管理などの研修を行い、フィジカルトレーニングやケガ予防、高大連携の取り組みの成果と課題、公式戦の振り返りなどを共有。加えて、各部の顧問から示された目標と指導計画などを職員室内に掲示し、各部の状況を知ることができるようにした。同センターのセンター長の相馬弘副校長はこう語る。

「体づくりやチーム力の強化をどう行つか、レギュラー以外の部員がどうすれば意欲的に練習できるかなどは、競技が異なっても参考になる点があります。そうしたことを互い

に学べるよう、各部の状況を共有するようにしました。その効果もあってか、23年に野球部が選抜高等学校野球大会で初優勝を果たしました」

また、各部は清掃や雪かきなどの地域貢献活動にも取り組んでいる。「地域貢献活動に対して、地域の方からお礼の電話をいただくこともあります。競技力を磨くだけでなく、部活動を通して人間力を高めることも大切に行っています」（相馬副校長）

変革の成果と展望

教師の働きがいをもさらに高め、情熱を持って改革を継続

この10年間の改革は、様々な形を実を結んでいる。より高みを目指して努力する生徒が増え、ここ数年、東京大学の合格者が毎年出ている。さらに、生徒が自ら応募して、ベトナムでの青少年交流事業やカンボジアでのSDGsの研修に参加するなど、学校外でも活発に活動している。国際交流担当の當眞（とうま）デニス先生は、国際交流の深化に伴った生徒の

変化について次のように語る。

「内向的だった生徒が外国人留学生と積極的に英語で話したり、学校行事の準備で困っている外国人留学生に英語で助言したりする姿が目にしたこともあります。そうしたコミュニケーションの中で日常的に異文化に触れる経験は、進学や就職をした後にも生きるものだと思います」

学校の魅力が向上し、生徒数が増加している今、教師の意欲向上に留意が必要だと、吉田校長は言う。

「教師は情熱を持って改革に取り組んでくれています。それに伴い、多忙感が増えています。教師自身が幸せでなければ、生徒に幸せについて語ることはできません。教師が働きがいを持って生き生きとしている姿を生徒に見せれば、生徒は学びへの意欲や将来への期待感を高め、それが教師の意欲向上につながっていくものと考えます。教師の働きがい高める環境づくりにも力を入れています」と

ベネッセが見た軌跡

先生方が互いに尊重し、改革を推進

山梨学院高校を担当させていただく中で、コース・系列ごとに特色のある教育を行いつつ、学校一丸となってご指導をされている点に魅力を感じています。そうした一体感は、すべての先生が各コースのロードマップを深く理解し、本気で課題に向き合っているから生まれているのだと思います。同席させていただいた校内のディスカッションでは、若手からベテランまで、先生方が互いを尊重しながらも活発に意見を交わされていました。また、進路講演会などでは、日本人の生徒が様々な国からの留学生と積極的に交流する姿を目にしました。そうした光景は、まさに同校の理念に基づく日頃の教育活動の成果であり、本記事にもある同校の魅力の1つである「国際力」が表れていた場面でした。

さらなる魅力化を推進される学校、先生、生徒を引き続きご支援していけるよう、私も精進してまいります。

(株)ベネッセコーポレーション首都圏支社
山梨県・私立山梨学院高校担当 藤井翔太



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任